現代タイ理解を深める社会科授業開発

―タイ北部山岳少数民族の事例を通して―

児玉康弘（新潟大学教育人間科学部）
宮薗　衛（新潟大学教育人間科学部附属教育実践総合センター）
志村　喬（上越教育大学）
藤巻　真（新潟大学大学院）
渡部裕也（上越教育大学大学院）
安岡卓行（上越教育大学大学院）

Developing a Social Studies Plan for Contemporary Thailand
－ A Case of Hill Tribes in North Thailand －

Yasuhiro KODAMA , Mamoru MIYAZONO , Takashi SHIMURA ,
Shin FUJIMAKI, Yuuya WATANABE and Takuyuki YASUOKA

目　次

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　小学校「社会科」における単元計画
Ⅲ　中学校「社会科地理的分野」における単元計画
Ⅳ　おわりに
（１）「タイ王国」理解を深める小学校社会科授業の開発過程と展望
（２）「山岳少数民族社会の変容と課題を考える社会科授業開発研究
－タイにおけるアカ族を事例として－」を振り返って

Ⅰ　はじめに

筆者等は、平成１８年度と平成１９年度に新潟県国際交流協会委託事業「大学＆ＮＧＯと連携した国際協力ユース育成事業」（単年度事業）の一環として、社会科・総合的な学習の時間におけるアジア理解のための授業開発に取り組んできた。

本委託事業のねらいは、主に次の２点である。

①大学生・大学院生がＮＧＯによるアジアの開発途上国（地域）支援の実態に触れ、アジア諸国の文化や歴史・政治等に対する興味関心を高めること

②スタディ・ツアーを実施し、そのツアー体験を踏まえて授業開発に取り組み、小中学校での国際理解・異文化理解教育の実践を支援すること

このために、新潟県内のＮＧＯによるアジア諸国の支援活動地域へのスタディ・ツアーの実施、それ

を踏まえた授業開発と実践に取り組み、それを授業プログラムとして冊子にまとめてきた。

平成１８年度は、筆者等新潟大学教育人間科学部の教員と学生が主体となって、新潟県日中友好協会による中国黒竜江省モンゴル民族自治県バイヌル村の荒漠化防止のための植林活動と小学校への支援活動を対象としてスタディ・ツアーと授業開発に取り組んだ。その成果は、既に『現代中国社会の理解を深める社会科・総合的な学習の時間　授業プログラム活用ガイド』（２００７年１月　総頁数５１頁）として公表し、新潟県内の全小中学校に配布した。また、「現代中国社会理解を深める社会科授業開発研究―黒竜江省へのスタディ・ツアーを通して―」（新潟大学教育人間科学部附属教育実践総合センター研究紀要『教育実践総合研究』第６号、２００７年　１～２８頁）としてまとめた。

本論文は、その第２年次研究（平成１９年度研究）の成果である。既に、活用ガイドとして発行したが、ここでは大学院教材開発実習の一環としてとしてまとめた。今年度の取り組みのねらい・内容は以下の通りである。

（１）タイ山岳少数民族支援の会（代表：高橋素三子）と連携して、タイ北部チェンライ県の山岳少数民族アカ族の村での民泊と小学校・支援施設訪問を中心とするスタディ・ツアーの実施
（ツアーは２００７年１１月９日～１４日の期間に実施）

（２）スタディ・ツアーを通して、タイ国内の山岳少数民族アカ族の生活の様子や課題について理解するとともに、その生活を支援するＮＧＯ団体の活動にも触れる

（３）スタディ・ツアーを通して学んだことを踏まえ、タイ理解のための社会科授業プログラム開発とその実践

また、今年度の取り組みの特徴は、新潟大学教育人間科学部と上越教育大学の共同プロジェクトとして実施したことである。大学の垣根を越えて、同じ新潟県内の教員養成に取り組む２つの大学・学部が連携協力して取り組んだ。新潟大学からは児玉・宮薗と学生・院生４名が参加した。上越教育大学からは、志村喬准教授と院生２名が参加した。両大学からの参加者は、総勢９名である。

本書には小学校と中学校の２つの授業例を掲載した。何れも実践を踏まえたものである。

小学校のプログラムは、上越教育大学グループが志村准教授の指導の下に開発し、実践した。実践は２カ所の小学校で行った。第１回は、２月１２日に上越教育大学附属小学校６学年のクラスで実施した。またその成果・反省を基に、３月１３日に新潟大学教育人間科学部新潟小学校５年生のクラスで実施した。共に授業者は、大学院生の渡部裕也である。

中学校のプログラムは、新潟大学教育人間科学部グループが児玉・宮薗の指導の下に、中学校地理的分野の授業として開発して、２月２７日に新潟大学教育人間科学部附属長岡中学校２年生を対象として実践した。授業は大学院生の藤巻真を中心に、学部生の佐藤友哉・大越崇宏・原里佳子の協力を得て実践した。

タイ山岳少数民族の生活・文化を切り口にして、小学校ではタイ国の理解を、中学校では少数民族の生活・文化の変化とその課題と国際協力・支援の在り方に目を向ける内容である。スタディ・ツアーと授業開発、実践を通して、筆者等自身が現地で生きる人々の願いや課題についての理解を更に深める必要性を感じる。

なお、これら２つの授業開発事例が、小学生・中学生の現代アジア理解の一助になれば幸いである。

（本報告書は、活用ガイドの成果をほぼ転載したものである）

（新潟大学教育人間科学部附属教育実践総合センター　宮薗　衛）

Ⅱ　小学校「社会科」における社会科授業開発

1.　単元の概要

本単元は、小学校学習指導要領社会科６年内容(3)のアに位置付けるものとして作成した。

> (3) 世界の中の日本の役割について、次のことを調査したり地図や資料などを活用したりして調べ、外国の人々と共に生きていくためには異なる文化や習慣を理解し合うことが大切であること、世界平和の大切さと我が国が世界において重要な役割を果たしていることを考えるようにする。
> ア 我が国と経済や文化などの面でつながりが深い国の人々の生活の様子
> （文部科学省「学習指導要領解説　社会編」日本文教出版, 2006, p105-108）

私たちはタイ王国（以下、タイ）へスタディーツアーの一環として行き、学んだことを生かし授業実践をする。しかし、授業を受ける児童にしてみれば、「なぜタイについて学ぶのか」ということになるであろう。そこで、まずタイについて学ぶ必要性や「知りたい、調べてみたい」という興味・関心がもてるような単元・授業を構成することを意識した。なお、児童自らが調べる活動は時間の関係上多くの時間をとることができなかった。

「タイとはどのような国だと思いますか。」私たちでもなかなか答えられない質問である。第一次では、タイについて知り、タイと日本の繋がりが深いということを知り、興味関心を高めることをねらいとした。第一次の主たる活動は、パワーポイントで実際に撮影してきた写真資料を見ること、地図帳で調べること、ワークシートに調べたことを記入することである。地図帳を用い、調べるということがここでは重要になってくる。写真資料も重要ではあるが、まずタイと言う国を認識するために位置、人口、面積、首都、言葉、などの基本的な情報はおさえなければならない。児童自らがタイについて調べ、書くという活動はタイについて学習するための基礎となる。

「東京を知ることで日本を知ったことになるでしょうか。」これには、日本人の誰もがそれは違うと言うであろう。タイにおいても同じである。バンコクを知ればタイを知ったことにはならない。私たちは、スタディーツアーでチェンライという北部の地域にも訪れ、山岳少数民族であるアカ族の村にホームステイした。そこで、第二次では写真を比較することでタイ国内における多様性を考えられるようにすることをねらいとした。主たる活動は、パワーポイントで北部地域を認識すること、写真を比較し気づいたこと疑問に思ったことをワークシートに記入することである。

なお、本単元計画を踏まえて、2008 年 2 月 12 日（火）に上越教育大学附属小学校 6 年 2 組及び 3 月 13 日（木）に新潟大学教育人間科学部附属新潟小学校５年生において研究授業を実施した。

2.　指導計画（全 2 時間）

⑴ 単元名

タイの人々の様々な生活

⑵ 単元のねらい

タイと日本の結びつきが深いことを知り興味関心を高めるとともに、タイ国内で様々な生活スタイルがあるということを、写真を通して考えることができる。

⑶ 教材について

本時では、人々の生活の様子を知ることを通してタイの多様性について学習していく。また、首都バンコクにおいても山岳少数民族の村においても、生活様式はいくら違っても「やっぱりタイなんだ」ということを感じさせるためには、タイ国内における共通なものが必要である。それには、国王への忠誠心を知ることが重要である。街中のビルに、国王の写真が大きく貼られているのが印象的である。また、山岳少数民族の家の中でも国王の写真は飾ってある。また、タイの国旗の青い部分は国王を意味している。タイにとって国王とは、特別な存在である。第一次、第二次を通して国王について触れつつ展開していく。

第一次では、タイについて知識がないことが予想されることからタイの基本情報を押さえ、さらにタイと日本との繋がりが深いことを知り、興味関心を持たせる。ワークシートを用いて、首都、面積、人口、気候、通貨、言葉、スポーツ、宗教、観光名所、料理、国の形について調べ記入させる。地図帳で調べられる項目については班で協力して調べ、地図帳で調べられない項目についてはパワーポイントを用い写真資料で説明した。また、通貨については本物を班に一つ配る。タイと日本の繋がりでは、地図帳（帝国書院「楽しく学ぶ　小学生の地図帳　4・5・6年」2006）p74-76に載っている、観光で多くの日本人が訪れる国・地域のマークで、タイがアメリカ・韓国・中国に次ぐ第4位であることを知り、タイが意外にも上位に入っていると言うことを知る。また、統計資料から日本とタイの輸出入の関係や日本企業が進出していることを知り、両国お互いになくてはならない存在であることに気づかせたい。さらに、私たちの周りにもタイがあると言うことを知るために、近くのスーパーに売られているタイ製の商品に触れる。本時では、タイカレー、エビ、鶏肉、を実際に提示する。

第一次ではタイという国について大きく捉え、第二次では範囲を狭めタイ国内の地域について学習する。都市（バンコク）と村落（山岳少数民族の村）の写真を「衣・食・住」と比較することを通して、タイ国内にも様々な生活様式があることを知り、考える。まず、北部地域の位置を確認し山岳少数民族の人々の生活の写真を見る。その後、各グループに写真を配布し自由に見ながら考える活動をする。また、先に述べたように山岳少数民族の村の家の中でも、国王の写真が飾られていることに少し触れる。これらを通して、タイ国内で様々な生活スタイルがあることを知り、タイを学ぶ基礎を養う。

⑷ 単元の構想（全2時間）

第一次　タイと日本のつながり

ねらい　タイの基本情報やタイと日本との結びつきが深い事を知り、興味関心を高める。

第二次　タイ国の人々の様々な生活

ねらい　タイ国内で様々な生活スタイルがあることを、写真を通して考える。

⑸ 単元の展開

【1時間目】

時間	・学習活動　○発問	予想される児童の反応	資料	・支援　◎評価
5分	○ここはどこでしょうか。 ・正解を発表し、学習する国を認識する。 ・タイをイメージしてみる。 ○タイに行ったことのある人いますか。	日本、新潟、アメリカ、東京、大阪、インド 暑い、象、肌が黒い、食べ物が辛い、タイ料理、カレー、タイ米、米作り、ムエ	1～13	・パワーポイントで写真を提示する。予想をさせる。 ・反応がない場合は、先へ進む。

	○タイはどのようなところだと思いますか。	タイ、仏教、わからない		
20	○この人は誰でしょうか。 ・タイの基本情報を知る。 ・地図帳で一緒に確認する。（位置、日本からの方位） ・地図帳で調べる。（面積、人口、首都、国旗、国の形） ・写真や実物から知る。（言葉、通貨、スポーツ、気候、宗教、観光名所、タイ料理） ・タイと日本の結びつきが強いことを知る。 ・海外旅行者の渡航数、経済（貿易・日本企業の進出）、日タイ修好 120 周年	有名人、芸能人、スポーツ選手、王様、大統領、首相、社長、おじさん	14 ・15 16 ～21 22 ～31	・地図帳で地図や統計を用いて、調べさせる。 ・身近なタイの製品、タイ産のものを提示する。 ・説明が多くなるので長くならないよう、配慮する。
5	・タイについて分かったことや授業の感想をまとめる。			・時間が余れば、感想を発表してもらう。

【資料】

1



2 水田風景



3 道路沿いに立つ日本企業の大きな看板



4 道路沿いに立つ日本企業の大きな看板



5 国王の肖像画



6 チェンライの朝の様子



7 僧侶と托鉢をする人



8 チェンライの朝市の様子



9 トヨタ製の自動車



10 水上生活の様子



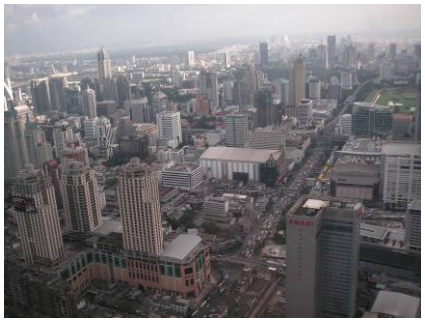
11 バンコクの交通渋滞



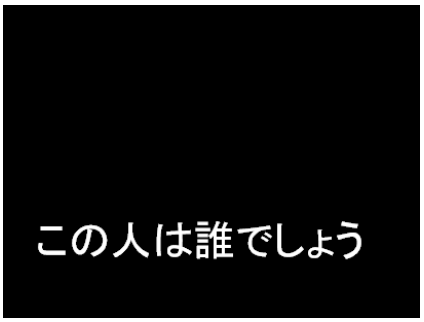
12 伊勢丹



13 近代的な都市部



14



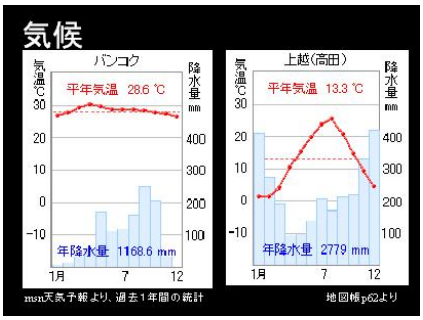
15 国王の肖像画



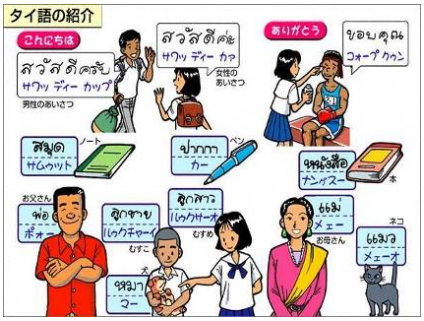
16



17 バンコクと上越（高田）の気温と降水量のグラフ



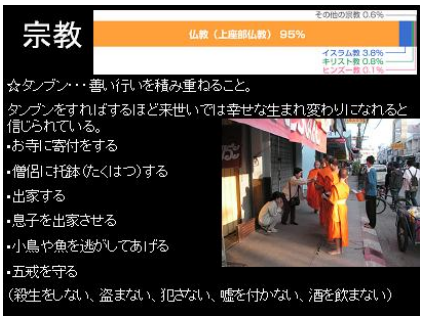
18 タイ語について



19 セパタクローとムエタイ



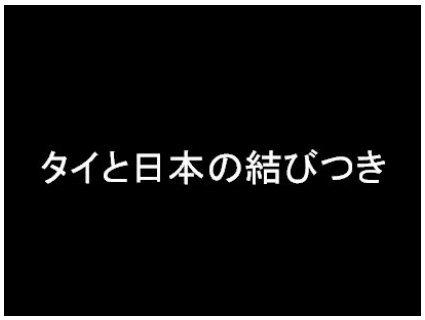
20 宗教について



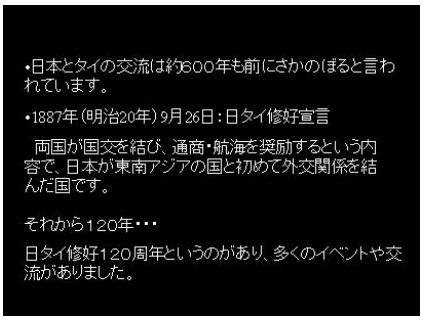
21 暁の寺院



22



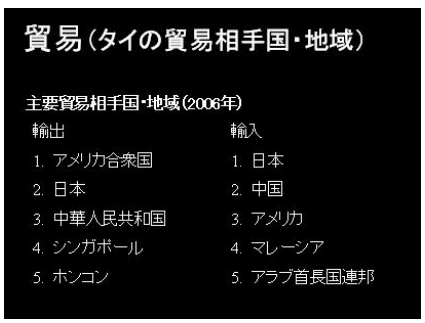
23 日本とタイの繋がりについての歴史



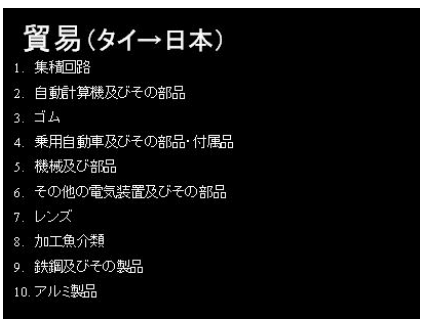
24 帝国書院『小学生の地図帳』2006 p74-76



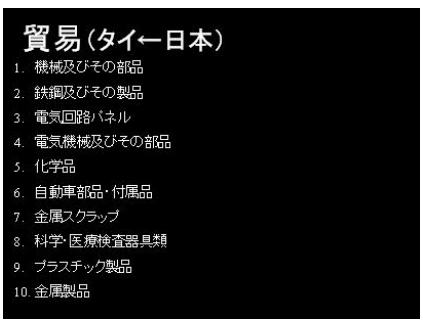
25 貿易について



26 貿易について



27 貿易について



28 タイに進出する日本の企業の数



29 要人往来

年月	要人名
1997年1月	斎藤参議院議長
1997年3月	秋篠宮同妃両殿下
1998年5月	小渕外務大臣
1998年12月	寛仁親王殿下
1999年7月	秋篠宮同妃両殿下
2000年1月	小渕総理
2000年2月	小渕総理（UNCTAD）
2000年2月	河野外務大臣
2001年9月	秋篠宮同妃両殿下
2002年1月	小泉総理
2002年6月	川口外務大臣（アジア協力対話）
2003年6月	川口外務大臣（アジア協力対話）
2003年8月	秋篠宮同妃両殿下及び両内親王殿下
2003年8月	川口外務大臣（APEC閣僚会合）
2003年10月	小泉総理（APEC首脳会合）
2005年1月	町村外務大臣
2005年8月	秋篠宮殿下
2006年6月	天皇皇后両陛下（タイ国王即位60周年記念式典）
2007年3月	秋篠宮殿下

30 要人往来

年月	要人名
1997年1月	チュラポーン王女殿下
1997年3月	チュラポーン王女殿下 シリワンワーニー王女殿下
1997年5月	シリキット王妃陛下 チュラポーン王女殿下
1997年6月	プラチュアップ外相 チュラポーン王女殿下
1997年10月	チャワリット首相
1998年8月	スパチャイ副首相
1998年11月	スリン外相
1999年10月	チュアン首相
1999年11月	ミーチャイ上院議長（参議院議長相当）
2000年6月	チュアン首相（小渕前総理合同葬）
2000年7月	スリン外相（サミット及び第4回外相アウトリーチ会合） チュアン首相（サミット開発途上国首脳との対話） シリントーン王女殿下（集水反陛下御機）
2001年9月	シリントーン王女殿下
2001年10月	チュラポーン王女殿下
2001年11月	タクシン首相
2002年1月	スラポアット外相（アフガン復興国際会議）
2002年4月	ガラヤニ王女殿下、ウボンラット王女殿下
2002年5月	スラポアット外相（タイ・フェア）
2002年8月	スラポアット外相（東アジア諸国イニシアティブ閣僚会合）
2002年10月	ガラヤニ王女殿下

31 要人往来

2003年2月	ウタイ下院議長（衆議院議長招待）
2003年6月	タクシン首相、スラキアット外相（日経「アジアの未来」）
2003年12月	タクシン首相、スラキアット外相（日ASEAN特別首脳会議） ガラヤニ王女殿下
2004年6月	スラキアット外相（日経「アジアの未来」）
2005年5月	カンタティー外相（ASEM外相会合） ガラヤニ王女殿下
2005年8月	タクシン首相
2006年1月	ワチラロンコーン皇太子同妃両殿下
2006年4月	タクシン首相（非公式訪問）
2006年5月	カンタティー外相（タイ・フェスティバル）
2006年8月	シリントーン王女殿下
2006年10月	チュラポーン王女殿下
2007年2月	ニット外相（日タイ修好120周年開幕式典）
2007年4月	スラユット首相
2007年10月	チュラポーン王女殿下
2007年11月	ニット外相（日タイ経済連携協定（第1回合同委員会））
2008年1月	ニット外相（日メコン外相会議）

【資料の出典】

17 NOCS「雨温図作成ソフト」(http://nocs.myvnc.com/study/uonzu.htm)

18 IPA「教育用画像素材集サイト」(http://www2.edu.ipa.go.jp/gz/)

24 帝国書院「小学生の地図帳」

【2 時間目】

時間	・学習活動　○発問	予想される児童の反応	資料	・支援　◎評価
5 分	○ここはどこでしょうか。 ・タイの北部を地図で確認する。	山、田舎、村、タイの山奥	1 ～ 12	
20	・タイにおける人々の生活を、写真を通して考える。 ・写真（都市と村落）を比較して、気づいたこと疑問に思ったことをワークシートに記入する。 ・北部もやっぱりタイであ	都市は近代的だ、村落は貧しそうだ	13 ～ 18	・机間支援をする。 ・バンコク市内での国王の

	るということを、写真を通して王室への尊敬の念を感じる。 ・前時の問題の正解を発表し、タイの正式名称が「タイ王国」であることを知る。			肖像画と、北部地域での屋内にある肖像画などの写真を見せる。
5	・感想・調べてみたいと思ったことなどを書く。			・時間が余れば、写真を見て振り返る。 ◎多様性について考えることができている。（ワークシート）

【資料】

1



2 チェンライにある学生寮「夢の家」



3 アカ族、機織の様子



4 アカ族民族衣装



5 アカ族の台所



6 アカ族の朝食



7 朝食に出てきた竹虫



8 アカ族の村



9 住宅の外観とソーラーパネル



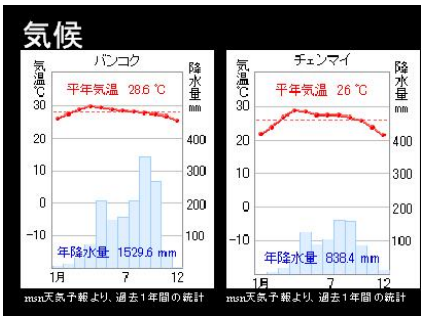
10 アカ族の家の中の様子



11 バスルーム



12 バンコクとチェンライの気温と降水量のグラフ



13 アカ族民族衣装



14 グリーンカレー



15 住宅の外観とソーラーパネル



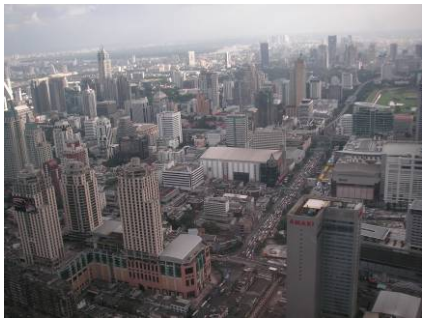
16 チャオプラヤ川で船に乗る人々



17 アカ族の朝食



18 近代的な都市部



3.　指導上の留意点

(1) 授業時間数について

今回実践した上越教育大学附属小学校では、30 分授業を 2 コマ行った。実際に、実践をしてみると内容が多く用意した内容を全て取り扱うことはできなかった。45 分授業であれば、このままのプランで実践が可能である。しかし、学習指導要領内容(3)では「調査したり地図や資料などを活用して調べ、・・・」、内容(3)アの解説では「・・・児童一人一人が自らの興味・関心や問題意識などに基づいて、調べる国を一か国選択するようにする。」と、このように本来であれば児童自らの興味・関心に基づき調べる活動が単元の中に組み込まれてくる。今回の実践では、時間が限られていることもあり調べる活動を授業内で少し扱ったものの、児童が自ら主体的に調べ学ぶという構成にすることができなかった。活用する歳には、児童自ら調べる活動をとり、タイ料理をつくって食べたりタイ語に触れたりするなど、タイを

実感できる活動を組み込むこが必要である。そのために、児童に実態に合わせてもう少し多く授業時数を確保する必要がある。

⑵ 第一次について

タイの基本情報における項目のうち、スポーツ、気候、宗教、観光名所、タイ料理、についてはある一部の情報提示に偏ることがあるので注意していただきたい。ここでは、基本的な日本人が考えるタイのイメージにまずは近づいていければと考えている。そこで参考になるのが、旅行パンフレットである。情報に偏りが生じてしまうことは、どの国を学習するにも様々な文化があることから留意しなくてはならないが、まず単元の第一次としてタイの国を理解するために、最低限押さえておかなければならないことが掲載されていることが多い。そのまま使用してもいいかもしれないが、児童の実態に合わせ工夫する必要がある。

⑶ 第二次について

バンコク（南部地域）と山岳少数民族（北部地域）との「衣・食・住」の写真比較であるが、これについても偏った認識にならないように、比較後に教師から補足が必要である。衣では、山岳少数民族が普段から民族衣装を着ていないことを補足する必要がある。そのために、写真には普段着を着た女性と男性の写真を用いた。食では、タイの人々は外食が基本的に多いので、バンコク（南部地域）ではグリーンカレーを提示した。バンコクでは屋台が多く、日本人からしてみれば毎日が「お祭りでもやっているのかと」いう印象になるくらいである。朝食、昼食、夕食と屋台で全て済ませる人も少なくない。したがって、カレーを主に食べていると言うことではなく、代表的な料理としてタイカレーを提示した。それに対し、山岳少数民族では自給自足が基本的な生活スタイルであるので、家庭的な料理の写真を提示した。住では、都市景観と村落景観がはっきりわかる写真を提示した。

実際の授業では、とても興味を持ってくれた。それは、タイとの繋がりが深いこと（旅行者数がアメリカ・韓国・中国に次ぐ第４位であること）を知ったり、本物や具体物に触れたりするところで反応がとてもよかった。繋がりに関しては、旅行者について触れた。日本企業の進出、貿易などについては時間の関係上触れることができなかった。本物や具体物に関しては、お金、エビ、タイカレーについて今回は触れた。日本企業のタイ製の製品、貿易で多く取引されているもの、タイ米なども身近なお店に販売していれば提示したい。その中でもお金は、とても興味をもった。実際の物がなければ、IPA 教育画像素材集のホームページでダウンロードしプリントアウトできる。お金には国王の肖像画もプリントされていることから、本単元での終末に関連付けられた。

タイ王国について少しでも多くの児童が興味・関心を持ち、文化や伝統を尊重する態度や異なる文化や習慣を理解し合うことが大切であることについて考えることができれば幸いである。





授業の様子（上越教育大学附属小学校）

（上越教育大学大学院　渡部　裕也）

Ⅲ　中学校「社会科地理的分野」における社会科授業開発

1.　単元の概要

何を教育内容として設定することが適当か検討を重ねる中で、見聞・体験してきたアカ族の社会が抱えている課題とその背景について焦点化して生徒たちとともに考えることが望ましいのではないか、という結論に至った。旅行体験をただ伝えるだけでは社会科授業にならないし、観点や題材を広げすぎても生徒の思考を拡散させる恐れがあるからである。そこで学生たちは、ツアーの体験を反省的に吟味すると共に、アリヤ氏とメールでやりとりをしながら以下のような教育内容を構想していった。

アカ族社会が今日抱えている問題は、伝統的部族社会と近代的タイ国民社会の間の相克の中で発生している。その大きな原因が生業である農業をめぐる問題である。アカ族は伝統的に焼き畑農業と家畜育成により自給自足的に生活を営んできた。山岳地帯の自然の資源を移動しながら利用して、衣類は機織り、住居は木造高床式建築により賄ってきた。しかし、焼き畑は移動によって森林資源を喪失させ環境問題の原因になるとして、タイ政府はその面積に制限を設けたのである。このことは必然的にアカ族にとって農業生産と収穫の減少をもたらす。

一方で、定住化が進む集落の付近に道路や電線などのインフラが整備されてゆくと、町や都市との交流が進むみ、テレビなどの家電品やコーヒーなどの嗜好品、T シャツやジーパンなどの既製品衣類など商品経済が浸透してくる。自給自足経済が徐々に崩れていくのである。事実、学生たちが見聞したことも、そういった商品に囲まれたアカ族社会の生活の変容であった。女性たちはかつては伝統的な衣装を日常的に身にまとっていたが、今では簡単な洋服で生活をしており、アリヤ氏の村では食事をしながらテレビを見るという家庭も珍しくはない。

このような近代的な生活を営むには、商品を購入するための貨幣が必要であるが、先に見たように焼き畑農業の制限により、従前の方法での収入は確保できない。そこでアカ族の男性たちの中には都市や海外に出稼ぎに行く者も現れた。台湾に出稼ぎに行った男性の家庭では、最も立派な家屋が見られた。また、換金作物を栽培して市場で売却したり、伝統的工芸品を販売したりなど貨幣経済への対応も行われている。

しかし、都市部でより収入の高い職種を求めるには、学歴や資格が必要であり、農業の改善のためにも技術や資本が必要である。根本的には、まずタイの国籍、市民権をきちんと獲得する必要がある。そのためには、教育水準を向上させることが最大の課題となる。その具体的で最も典型的な取り組みが、アリヤ氏らの上記の「夢の家」の取り組みだということになる。

ところが、教育水準を向上させるということは、別の観点から見るとアカ族社会を、タイ国民国家へ包摂させていくということでもある。アカ語をしゃべり、アカ族の中で生活することで閉じ込められていた子どもたちが、タイ語で読み書きし、タイ人社会の中で職業や役割を求めていくことになる。ここにアリヤ氏ら村の指導層の悩みがある。それは、本質的にはアカ族としてのアイデンティティーをどのように維持していくかという問題であり、具体的には離村者の増加をどのように防ぐべきなのかという問題である。タイ国家が建てた公立学校で学ぶということは、タイの言語、文化、政治、経済、社会を学ぶということであり、タイ社会への同化・一元化と表裏一体の側面が強い。自ずと、アカ族の伝統や文化の学習は少なくなるわけである。伝統や文化の学習の場として機能していた村人たちの夜の集会や集いも、テレビや家電品の普及で家庭ごとの団らんの場が増えたために少なくなってきているという。

近代化は、村の共同体としての性質すら変容させている訳である。アリヤ氏らの願いは、アカ族の自立であるが、そのためには、一度はタイ人としての教育を受けても、アカ族としての民族的自覚を維持しつつ、村で安定した収入を確保するか、自分たちの村で新たな生業を創造していかねばならないという困難な課題が待ち受けているのである。

以上のようなアカ族社会の変化と課題を教育内容として、中学生に考えさせる指導案を作成していった。この教育内容の意義は、それがアカ族の特殊性を考えさせるだけではなく、近代国民国家における多数民族と少数民族の関係に見られる普遍的な問題を考えることになっているからである。例えば、明治以後の日本におけるいわゆる日本人とアイヌ民族の関係、戦後日本社会におけるいわゆる日本人と在日韓国・朝鮮人の関係にも同じ問題が含まれている。ただし、この関係性の理解は中学生には高度であるため、研究教育実習ではあくまでアカ族に焦点を絞った授業を行うこととした。

なお、本単元計画は、2008 年 2 月 27 日（水）に、新潟大学教育人間科学部附属長岡中学校 2 年生（3 クラス）を対象に研究授業を実施した。

2.　指導計画（全 2 時間）

⑴ 単元名

「アカ族の未来を守るために」

⑵ 単元の目標

○アカ族の社会の抱える課題の内容とそれへの取り組みの様子を、具体的な事例を通して理解する。
○アカ族の社会をよりよくしていくために、どんな取り組みが必要かを考える。

⑶ 指導計画（2 時間）

1 時　アカ族の社会の発展と変容について考える（60 分）
　○アカ族の伝統的な生活や文化の特色と、近代化が進展した現在の生活や文化とを比較することにより、アカ族の社会の発展と変容について理解する。
　○アカ族の社会の発展と変容からアカ族が抱える課題を見いだし、その背景や要因を理解する。
2 時　アカ族の豊かな社会の実現に向けて（40 分）
　○アカ族の社会の抱える課題に対して、どのような取り組みが行われているのかを理解する。
　○アカ族の社会をよりよくしていくために、どんな取り組みが必要かを考える。

⑷ 本時の学習活動

【1 時間目】

時間	学習活動	指導上の留意点（○主要発問）	資料
10 分	1. スタディツアーの概要をつかみ、タイへの興味・関心を高める。	・スタディツアーの概要（ツアーの目的、旅行ルート、各地域の様子）を、Power Point を活用して紹介する。 ・生活や文化の異なる多くの民族からなる国家であることを、資料集を活用して調べさせる。 ・山岳少数民族は狩猟・採集、焼畑耕作を主たる生業とし、山地において移動（国	1－15

		境を自由に往来）と定着を繰り返しながら生活を営んできたことを、PowerPoint を活用して紹介する。	
35	2. アカ族の伝統的な生活や文化の特色と、近代化が進展した現在の生活や文化とを比較することにより、アカ族の社会の発展と変容について理解する。	・アカ族の起源や生活様式、工芸文化、風俗・習慣などを、工芸品の実物や Power Point を活用して説明する。また Power Point を活用して、近代化の進展が、アカ族の伝統的な生活や文化に発展と変容をもたらしていることに気づかせる。 ・アカ族に関するクイズをだし、特色及び発展と変容をとらえようとする意欲をもたせる。 ○「アカ族の伝統的な生活や文化に変化をもたらしたものは何だろうか。」	16 －29
15	3. アカ族の社会の発展と変容からアカ族が抱える課題を見いだし、その背景や要因を理解する。	・ボーダーレス化（ヒト、モノ、カネ、情報が移動）の進展により、アカ族の社会が発展・変容していることや、それにより民族文化の衰退、急激な社会変化への不適応などの問題に直面していることを、PowerPoint を活用して説明する。	30 －34

【2 時間目】

時間	学習活動	指導上の留意点（○主要発問）	資料
10 分	1. アカ族の社会の抱える課題に対して、どのような取り組みが行われているのかを理解する。	○「アカ族の抱える課題の解決に向けて、どのような取り組みが行われているのだろうか。」 ・高地民教育及び開発財団（アブ・アリープロジェクト）の概要及びタイ山岳少数民族支援の会・高橋さんの話を、Power Point を活用して紹介し、アカ族の社会の抱える課題の解決に向けてどのような努力がなされているのかを理解させる。	35 －45
15	2. 基礎教育を受けられないことによって生じる問題について、具体的な例を通して理解する。	・非識字の状態を疑似体験し、非識字により生じる問題を、具体的な例を通して理解させる。 ・基礎教育を受けられないと、①生活が脅	46 －51

		かされる（生活の基礎知識が不足）、②収入の多い仕事に就けない（貧困の悪循環から抜け出せない）、③法的権利を理解し、それを行使する能力がいちじるしく制限される。また非識字の問題は社会における犠牲者の政治的な声を封じる（国籍が取得できない）ことなどを、Power Point を活用して説明する。 ・教育開発の現状とこれからの課題を、PowerPoint を活用して説明する。	
15	3.アカ族の社会をよりよくしていくために、どんな取り組みが必要かを考える。	・アカ族・アリヤさんの描く未来像を紹介する。 ○「アカ族の社会をよりよくしていくために、どんな取り組みが必要かを考えてみよう。」 ・ワークシートに考えをまとめ、発表させる。	52、53
課題	4.授業を通して分かったこと、気づいたこと、思ったことをワークシートにまとめる。		

【疑似体験】

○契約書にサイン

・生徒を一人選び、タイ族の経営する会社・店に就職しようとしているアカ族の立場であることを伝える。
・タイ語で「1 日 100 円で働きます」と書かれた契約書を渡す。
・「これが仕事の契約書です。タイ語でサインしてください。タイ語が書けないなら代わりにサインしてあげます」と言い、教師がサインを代筆する。
・不当な契約書であったことを伝える。

○事物の選択

・生徒を一人選び、子どもがいるアカ族の母親の立場であることを伝える。
・子ども（教師）が病気になったと仮定し、母親にタイ族の経営する薬局に薬を買いに行かせる。
・タイ語で「水」「薬」「毒」と書かれたペットボトルの中から、「薬」だと思うものを選んで買ってもらう。
・母親が選んだものが何かを伝える。またなぜそれを選んだのかを発表させる。

【資料】

1

アカ族の未来を守るために

授業者　大越崇宏
藤巻真
原里佳子
佐藤友哉

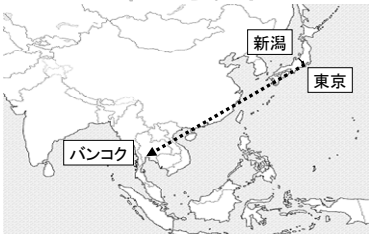
2

スタディツアーの目的

・アカ族と交流をする。
・交流を通して、アカ族の生活・文化の変化や、課題を理解する。

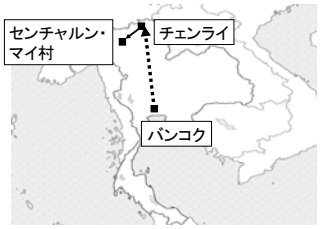
3

日本からタイへ



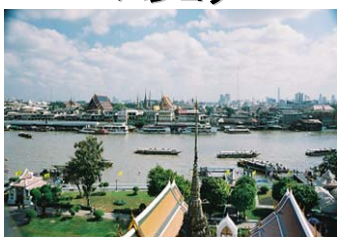
4

タイ国内



5

バンコク



6



7



8

チェンライ



9

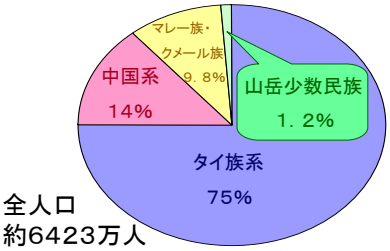


10



11

タイの民族構成

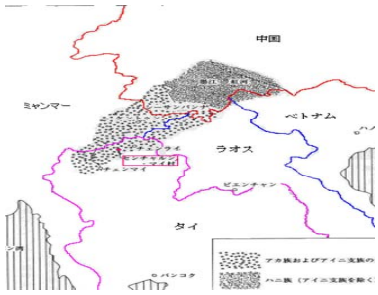


12

山岳少数民族とは

・狩猟・採集・焼畑耕作が主な生業
・多くが標高600～1000mくらいの場所で生活
・山岳少数民族は約77万人
・種族はカレン族・モン族・リス族・アカ族など

13



14



15

アカ族は多くの国に分布

⬇

・アカ族は国境を自由に行き来していた。
・焼畑耕作を行うために移動していた。

16

アカ族の生活の変化と課題



17

アカ族の民族衣装は？



18

正解は④！



19

他の山岳少数民族の民族衣装


カレン族


モン族


リス族

20

伝統的な機織り



歩くように織り進むことから「歩き機」と呼ばれる

➡ 自給的

⬇

現在もこのような服装をしているのだろうか？

21

アカ族の近年の服装



Tシャツ・ジーンズ・トレーナーなどの既製品を着るようになった。

⬇

なぜだろうか？

22

アカ族の伝統的な住居は？



23

正解は①



＜特徴＞

・カヤ葺屋根

⇕ 自給的

・高床式

→風通しを良くする

→害虫・害獣の侵入を防ぐ

24

私が泊まったアカ族の住居



- アカ族の近代的な住居

⬇

- 頑丈で便利な住居

25

便利さを手に入れるために・・・



頑丈で便利な住居の建築

⬇

貨幣が必要になる

26

便利さを手に入れるために・・・



既製品の衣服を購入

⬇ なぜ？

機織りをする手間が省ける

⬇

貨幣が必要になる

27

アカ族の伝統的な農業
～焼畑農業～



- 森林や草原を焼き払い、灰を肥料として作物を栽培する。
- 栽培を重ねると地力が落ちるため、数年で耕地を放棄し、他地域へ移動する。

28

アカ族の農業（食生活）の変化

- 焼畑農業を行い、耕地を移動しながら自給的な生活をしていた。

⬇ 政府の環境保全対策

耕地の移動が制限

⬇

地力の低下＝収穫量の減少

↙ ↘

・自給的な生活が困難に

＝食料の購入が必要に

・肥料や農薬が必要に

29

⬇ ⬇

貨幣が必要になった

↙ ↘

・換金作物を売ったり、出稼ぎで得た貨幣に

→ミカンなど　→村外、国外

⬇

よって、市場で食料品を買う世帯が増加した。

嗜好品を求める者もあらわれ始めている

30

近代化がもたらしたものとは・・・

- 伝統的な自給自足の生活から、貨幣を使ってものを買う生活に変化し、生活が便利になってきている。

⬇

しかし、貨幣が登場したことで新たな課題も出てきた。

31



・貨幣を多く得られる人（村）と、貨幣をあまり得られない人（村）との貧富の差が生じている。

32

伝統的な儀礼の消滅



＜ブランコ祭り＞

・アカ族の12ある儀礼のうちの1つ

⬇

現在、センチャルン・マイ村では行われていない

⬇

なぜ？

33

伝統的な儀礼の消滅

文字をもたないアカ族の社会では、儀礼の遂行が共同体の秩序を保っていた。

⬍

・便利な生活のために、貨幣を追い求めるようになった。

⬇

伝統的な儀礼が消滅しつつある。

34

アリヤさんの葛藤

「生活はどんどん便利になってきています。便利になるのは確かに良いことですが、それによって一緒に歌ったり踊ったり、また協力しあうことも少なくなりました。」

⬇

共同体としての意識が薄くなりつつある。



35

山岳少数民族の近代化

〇伝統が失われる

⬇

・機織りをできる人がいなくなる

・伝統的な行事や祭りが行われなくなる

36

〇村の外で働くようになる

⬇

慣れない都会へ出る

⬇

言葉や生活習慣の違い

⬇

教育の充実の必要性

37

アブ・アリ・プロジェクト

●活動の目的

〇工芸・民族文化継続と伝承

〇国籍取得の推進

〇エイズ・法律知識の講習

〇児童・無教育青年の教育

38

2000年、夢の家（山岳少数民族生徒寮）を設立



39



40



41



42



43

タイ山岳少数民族支援の会

●活動の目的

アブ・アリ・プロジェクトの支援

●具体的な活動

〇山岳少数民族紹介

〇工芸品の販売

〇「夢の家基金」活動

44



45

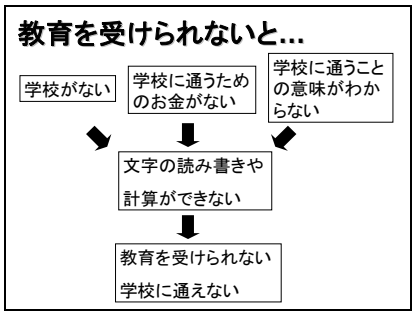
工芸品を日本で売る

⬇

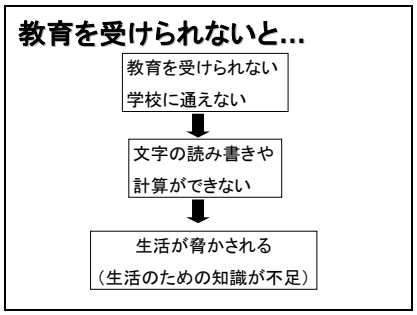
〇生産者である少数民族の人々の収入となる

〇伝統的な文化を絶やさないことにつながる

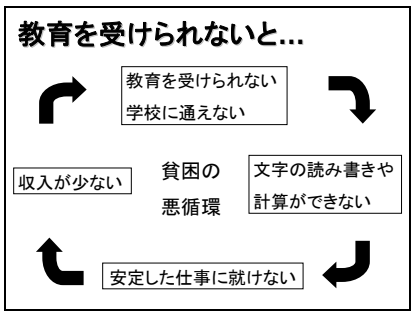
46



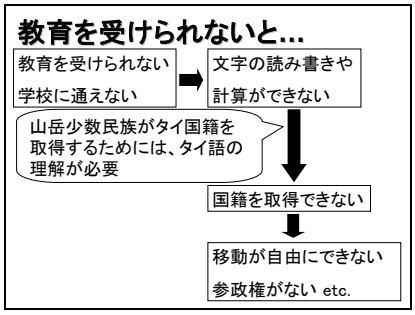
47



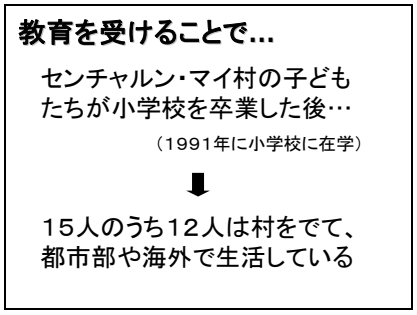
48



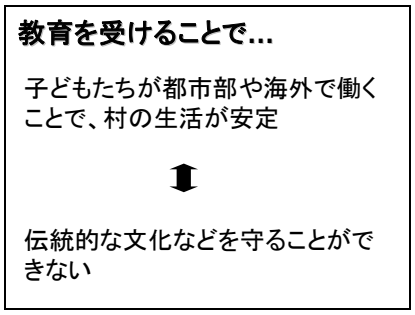
49



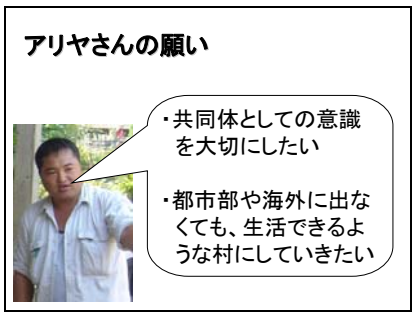
50



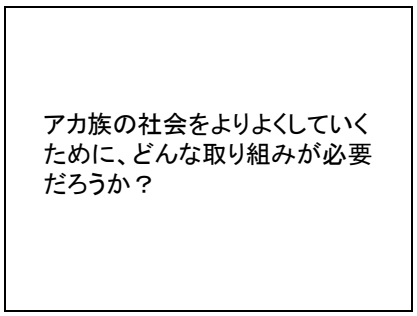
51



52



53



【資料の出典】

・13：諏訪哲郎「タイ北部アカ族の社会・生活・文化の変容と学校教育－センチャルン・マイ村の 1991 年から 2004 年」『加速化するアジアの教育改革 学習院大学東洋文化研究叢書』東方書店（2005）p.83

・17：モンゴル、ウランバートルおでかけ日和（http://chie.cside21.com/sansaku/minzoku.htm）、アジアの民族衣装（http://members.at.infoseek.co.jp/nwakana/minbu/isyou-aji. html）、Mapion（http://www.mapion.co.jp/area/kyoto/maiko.html）

・19：ASEAN-JAPAN CENTRE（http://www.asean.or.jp/）

・22：ねこからの手紙（http://www.neko-te.net/mongol2.htm）、きつねのお人形部屋（http://f38.aaa.livedoor.jp/~stfoxsd/cg030b.html）

・27：京都大学土壌学研究室（http://rafale.kais.kyoto-u.ac.jp/worldagr/tanzania3.html）

・32：さくらプロジェクト・タイ（http://www.geocities.co.jp/SilkRoad-Oasis/1850/akha.html）




3.　指導上の留意点

本単元計画の留意点として４点挙げる。指導の際の参考にしていただきたい。

(1) 学習内容

本単元計画は中学校社会科地理的分野の「(2)地域の規模に応じた調査、(ウ)世界の国々」の中に位置づけるものとして作成した。本単元では、タイの山岳少数民族である「アカ族」を取り上げた授業構成になっているが、この授業の前段階として、前もってタイの自然や農業、工業、民族、宗教などタイ国全体の学習をすることが必須である。近代的なタイの国民社会を認識した上で、伝統的な少数民族の社会を学習することで、タイという国がもつ課題をも浮かび上がらせ、認識を深めることができると考える。今回の授業の前には、2時間程度かけてタイの概略的な授業をしていただき対応した。

(2) 授業時間数

今回は2時間という限られた時間の中で、アカ族の生活の変化と課題、またその課題に対する取り組みを通してタイの認識が深まるように授業を構成した。しかし、2時間でこの授業をしっかり理解させるのは困難であったように思う。今回の授業内容であれば本来なら3時間から4時間程度の授業時間を確保し、地理的事象について探求させたり、作業的な学習を取り入れれば、生徒はより一層理解が深まるであろう。

(3) 授業方法

前述したように、今回の授業では、多くの内容を短い時間のなかで生徒に理解させる必要があった。そのため、PowerPointを使いながら講義形式で授業を進めていかざるをえない場面が多かった。講義形式の授業にありがちな知識注入型の授業にならないように、ところどころ発問を投げかけたり、アカ族に関するクイズを出したりして生徒が積極的に授業に参加できるように工夫したが、授業の中盤で集中力が切れている生徒もみられた。授業時間にもう少し余裕があるのであれば、作業的な学習などを取り入れ、生徒が積極的に授業に参加できるような工夫が必要である。

(4) ワークシート

今回の授業では、ワークシートを使って作業する場面は2時間目の授業の最後のみであった。1時間目では、作業時間の確保が難しかったことや生徒の思考の流れが止まるのを防ぐために、ワークシートの使用をあえて控えることにした。しかし、学習内容を記録するという観点からすれば、穴埋め式のワークシートなどを使いながら授業を進めることが必要であった。今回の授業では、授業後にまとめプリントを配布することでこれを補填した。

以上、指導上の留意点について４点挙げたが、国際理解の授業を行う際でもっとも重要なことは、生徒自身が授業内容に興味を持って積極的に授業に参加することであると考える。アカ族の社会に存在する問題を理解し、生徒自身が積極的にその問題解決策を模索することができるような授業になるように、十分な教材研究を行うことが求められる。

（新潟大学大学院　藤巻　真　協力者　学部生３名）

Ⅳ　おわりに

（１）「タイ王国」理解を深める小学校社会科授業の開発過程と展望

１．はじめにー授業開発の過程ー

上越教育大学から本プロジェクトには，大学院生２名（うち１名は現職中学校教諭の派遣院生）と筆者が参加し，スタディ・ツアーならではの有意義な体験学習・調査ができた。社会科の中でも地理教育領域を３名は専門とするため，授業開発においては地理教育的視座から小学校社会科授業開発を担当することになった。開発過程は，帰国後の３名による情報・体験の共有化，実践校である上越教育大学附属小学校との調整，実践学年（６年）にあわせた学習指導案の作成・検討，授業実践，授業検討会の実施，学習指導案の改定，再実践（第５学年）である。この過程では，本学学習臨床講座の朝倉啓爾教授，附属小学校の清水雅之教諭・泉豊教諭，並びに関係院生にも参画を求め貴重な意見を得ることができた。

２．単元目標の設定の主旨

単元目標の設定に際しては当初，本スタディー・ツアーの山場で鮮烈な体験をした北部山岳地域及びアカ族の人々の生活をもとにした授業開発を指向する傾向があった。しかし，自己体験に過度に依拠した授業になると教材としての汎用性が乏しくなるのではないか，世界地理が含まれていない小学校社会科で学んでいる児童にとってはタイそのものが地理認識として確立していないのではないか，との問題が話し合いの結果見いだされた。そこで単元目標を，汎用性のある写真・地図からタイにおける人々の生活を読み取り・考え・理解することができるという国家レベルの地理認識を重視した目標として設定した。

具体的には，実施学年が第６学年であることから，学習指導要領における「2(3)ｱ：我が国と経済や文化などの面でつながりが深い国の人々の生活の様子」に対応させ，第１時「日本とのつながり」，第２時「人々の様々な生活」を主題とした２時間からなる単元とした。

３．指導案作成における留意点ー地理的技能とスケールに配慮した地理認識の育成ー

指導案作成にあたっては，地理的技能と認識の育成に配慮した。地理的技能としては，各自が所有する地図帳からタイの基本情報を読み取りワークシートにまとめる活動場面を第１時に設定し，地図帳活用技能向上を意図した。これは，国家スケールでタイの地理認識を最終的に身に付ける学習にもなっている。一方，第２時は首都バンコクと北部山岳民族地域を比較させ国内の多様性と「タイ王国」としての統一性に気づかせるが，これはスケール変換へ気づかせながら地理認識を育むことを意図している。したがって，地理的見方・考え方及びそれを支える技能に留意した地理認識を育む指導案となっている。

４．実践を終えてー確かな時空間認識にもとづく社会認識育成への展望ー

実践授業の実証的分析は終了していないが，観察及びワークシートからは，外国「タイ王国」への児童の知的好奇心（「タイってどんな場所？」）に十分応える授業であったといえる。授業では，ほとんどの児童が進んで地図帳を開き，シートからは「タイ王国」へ想像力・思考力をめぐらせた過程と所産としての地理認識を見て取ることができる。アカ族が国境地域に居住するという地理的周辺性は，国籍を持たない，教育機会に恵まれない，といった社会的周辺性の背景になっている。そして，そのような理解は，アカ族を時空間の中で具体的に認識することー確かな地理認識と歴史認識を持つことーを基礎にした社会認識としてもたらされるものである。確かな時空間認識をふまえて子どもたちが「アカ族は，

何故国籍を持たないのか（持てないのか）？」，「アカ族が直面する問題解決にはどうしたらよいか？」といった問いを自ら持ち・探究する学習への発展，それに応える小・中・高の連携のあり方を実証的分析をもとに考察することが今後の課題である。

付記：教材研究では，タイ国境の人為性・社会構築性についてT. ウィニッチャクン(2003)『地図がつくったタイ：国民国家誕生の歴史』明石書店（原書1994），観光化によるタイの貧困問題解決事例について高寺奎一郎（2004)『貧困克服のためのツーリズム：Pro-Poor Tourism』古今書院 が，学習指導案作成では世界の国々調べでタイを取り上げた現行中学校社会科教科書『中学生の社会科　地理　世界と日本の国土』（日本文教出版）が，参考になった。

（上越教育大学　志村　喬）

（２）「山岳少数民族社会の変容と課題を考える社会科授業開発研究－タイにおけるアカ族を事例として－」を振り返って

１．研究の経緯

新潟大学教育学部社会課教育学研究室では、昨年度に引き続き、新潟県国際交流協会の委託事業である「大学＆ＮＧＯと連携した国際協力ユース育成事業」の一環として，社会科・総合的な学習の時間におけるアジア理解のための授業開発に取り組ませていただいた。

昨年度は、新潟県日中友好協会常任理事・事務局長の今野正敏氏の協力で、中華人民共和国黒龍江省へスタディツアーを行い、その貴重な体験に基づいて現代中国社会の理解を促す授業プログラムを開発し、県内の小・中・高等学校で研究教育実習を兼ねた実践を行うことができた。

今年度は、タイ山岳少数民族支援の会代表高橋素三子氏とアリヤ氏の全面的な協力で、タイ国チェンライ県へスタディツアーを行うことができ、その貴重な体験に基づいてアカ族を事例として山岳少数民族社会の変容と課題を考える社会科授業プログラムを開発することができた。また、今年度は上越教育大学と連携して，より幅広い視野での教育内容開発を行い，県内の小・中学校で実験授業を行うことができた。

いずれも，学生，院生（現職教員を含む），教官にとって得難い貴重な学習と研究の機会となったことを，あらためて関係各位に厚く感謝申し上げます。ありがとうございました。

２．研究成果

①教員養成教育としての成果

本研究は，新潟大学教育学部の４年間を見通した教育実習カリキュラムの一部として実施しているため，教員養成教育としての意義と成果を有している。特に本研究は，いわゆる研究教育実習のとしての一つのあり方を追求している。社会科教育学ゼミでは，これまで主に二つのスタイルでの研究教育実習を実施してきた。

一つは、学生自身の卒業研究が授業づくり研究であった場合、これを附属学校などで実験するもので、最もオーソドックスなものである。平成 16 年度の研究教育実習は、この型のものであり、学部４年生が附属新潟中学校において行い、卒業研究の質を高めることに務めた。この型は、学生自身の問題意識に基づいた発展的な教育実習が行われるが、研究のレベル・内容によっては実施校にカリキュラム上等の負担・迷惑をかけるという課題がある。

二つめは、大学教官が作成した、あるいは指導の下に作成された授業プランを、協力校において学生が実験・実証的に実践するものである。平成 17 年度の研究教育実習は、この型のものであるが、実習

の場は協力校ではなく、高校生体験講義の場を利用して実施した。
この型は、大学教官の研究と連動するため、学生にとって先端的で斬新な実験授業を経験することができるが、学生の主体性をどのように担保するかという課題がある。

これらに対し、本研究では新しいスタイルとして，外部の専門的機関と大学教官、学生が連携し、新しい教育内容を開発して実験授業を行うという方法を追求することができた。すなわち，平成 18 年度と平成 19 年度は、新潟県日中友好協会，タイ山岳少数民族支援の会などの専門機関や他大学と連携し、最終的に学生が実験授業を実施した。この型は、外部の専門機関と連携することにより、現実の社会に深く入り込んだ教育内容開発研究を行うことができる。その際，各専門機関には固有の社会的目的・課題があるので、それを研究教育実習における教育目的・課題と整合させる作業が不可欠であった。

今年度，ツアーに参加した新潟大学側の学生，院生４名は，全員教壇に立ってリレー式に授業を行い，それぞれ力量を高めることができた。まず，学部２年生の大越君は，教壇に立つのは初めてであるが，スタディ・ツアーの概要とアカ族の現状について的確に話を進めることができた。次に，大学院１年生の藤巻君は，アカ族社会の変化と原因，影響について生徒たちに考えさせる指導をインターンシップでの経験を生かして行うことができた。人文学部２年生の原さんは，伝統維持と生活改善のための取り組みの現状と必要性を理解させるための説明を行うことができた。最後に，学部４年生の佐藤君が，本実習や昨年度経験を生かし，教育水準の向上の必要性を疑似体験で理解させることができた。また，共同体の危機を再確認しつつ，危機回避のための手だてを考えさせることができた。

２年生，４年生，大学院生というそれぞれの学年段階に応じた役割をティームティーチング的に遂行しつつ，他者の実践にも学びながら，授業展開力を身につけることができたと考えられる。

②教育内容開発研究としての成果

本研究においても，昨年度と同様に，学生たちがスタディ・ツアーの成果を，新しい教育内容として中学校社会科の授業構成に活かすことができた。５泊６日のツアーで学生たちが体験したことは多様かつ濃厚なものであった。最初は何をどのように取り上げると，中学校社会科授業が構成できるのか五里霧中であった。様々な角度から試行錯誤し，検討した結果，自分たちが率直に意外に感じたこと，すなわち伝統的なアカ族の社会に，近代化という変化が始まっていること，それに伴って新しい課題も生じていることを教えてみようということになった。一つの社会の変化とその原因，結果について考えることは，自分たちの社会や他の社会の変化，原因，結果を考えることに間接的に役立つので，中学校社会科の教育内容として相応しいと考えたのである。

アカ族社会が今日抱えている課題は、伝統的部族社会と近代的タイ国民社会の間の相克の中で発生している。その大きな原因が生業である農業をめぐる問題である。アカ族は伝統的に焼き畑農業と家畜育成により自給自足的に生活を営んできた。山岳地帯の自然の資源を移動しながら利用して、衣類は機織り、住居は木造高床式建築により賄ってきた。しかし、焼き畑は移動によって森林資源を喪失させ環境問題の原因になるとして、タイ政府はその面積に制限を設けたのである。このことは必然的にアカ族にとって農業生産と収穫の減少をもたらす。

一方で、定住化が進む集落の付近に道路や電線などのインフラが整備されてゆくと、町や都市との交流が進み、テレビなどの家電品やコーヒーなどの嗜好品、Ｔシャツやジーパンなどの既製品衣類など商品経済が浸透してくる。自給自足経済が徐々に崩れていくのである。事実、学生たちが見聞したことも、そういった商品に囲まれたアカ族社会の生活の変容であった。女性たちはかつては伝統的な衣装を日常的に身にまとっていたが、今では簡単な洋服で生活をしており、アリヤ氏の村では食事をしながらテレ

ビを見るという家庭も珍しくはない。

このような近代的な生活を営むには、商品を購入するための貨幣が必要であるが、先に見たように焼き畑農業の制限により、従前の方法での収入は確保できない。そこでアカ族の男性たちの中には都市や海外に出稼ぎに行く者も現れた。台湾に出稼ぎに行った男性の家庭では、最も立派な家屋が見られた。また、換金作物を栽培して市場で売却したり、伝統的工芸品を販売したりなど貨幣経済への対応も行われている。

しかし、都市部でより収入の高い職種を求めるには、学歴や資格が必要であり、農業の改善のためにも技術や資本が必要である。根本的には、まずタイの国籍、市民権をきちんと獲得する必要がある。そのためには、教育水準を向上させることが最大の課題となる。その具体的で最も典型的な取り組みが、アリヤ氏らの上記の「夢の家」の取り組みだということになる。

ところが、教育水準を向上させるということは、別の観点から見るとアカ族社会を、タイ国民国家へ包摂させていくということでもある。アカ語をしゃべり、アカ族の中で生活することで閉じられていた子どもたちが、タイ語で読み書きし、タイ人社会の中で職業や役割を求めていくことになる。ここにアリヤ氏ら村の指導層の悩みがある。それは、本質的にはアカ族としてのアイデンティティーをどのように維持していくかという問題であり、具体的には離村者の増加をどのように防ぐべきなのかという問題である。タイ国家が建てた公立学校で学ぶということは、タイの言語、文化、政治、経済、社会を学ぶということであり、タイ社会への同化・一元化と表裏一体の側面が強い。自ずと、アカ族の伝統や文化の学習は少なくなるわけである。伝統や文化の学習の場として機能していた村人たちの夜の集会や集いも、テレビや家電品の普及で家庭ごとの団らんの場が増えたために少なくなってきているという。近代化は、村の共同体としての性質すら変容させている訳である。アリヤ氏らの願いは、アカ族の自立であるが、そのためには、一度はタイ人としての教育を受けても、アカ族としての民族的自覚を維持しつつ、村で安定した収入を確保するか、自分たちの村で新たな生業を創造していかねばならないという困難な課題が待ち受けているのである。

以上のようなアカ族社会の変化と課題を教育内容として、中学生に考えさせる指導案を作成していった。この教育内容の意義は、それがアカ族の特殊性を考えさせるだけではなく、近代国民国家における多数民族と少数民族の関係に見られる普遍的な問題を考えることになっているからである。例えば、明治以後の日本におけるいわゆる日本人とアイヌ民族の関係、戦後日本社会におけるいわゆる日本人と在日韓国・朝鮮人の関係にも同じ問題が含まれている。

この教育内容を扱うために，学生たちは，アカ族の衣・食・住の変化を，実際に撮ってきた写真などに基づいて，教材化していくことができた。次に，その変化の原因を，自給自足経済から貨幣経済への変化の中で捉えさせるための思考過程を組織することができた。そして，変化の結果，アカ族社会に起きてきた影響が，共同体の変質や解体であることに気づかせる手だてを講じることができた。見聞，体験したことに基づいて，質の高い焦点化された教育内容開発に一定の成果をあげることができたと評価されよう。

③実験授業としての成果

本研究では，開発した高度な教育内容を，実際の実験授業で，附属長岡中学校の２年生に一定程度理解させることに成功したという成果をあげている。生徒たちは授業の展開に沿って，アカ族の存在と居住地を知り，彼らの生活の実態が伝統的なものから近代的なものへと徐々に変化していることを，衣・住・食（生産面）の具体例からつかんでいった。そして，変化の原因に貨幣経済の浸透があることを，

出稼ぎや商品作物栽培の事実から理解していった。その上で，近代化は，ブランコ祭りなどの伝統的な文化の継承を困難にしていることなどから，共同体の役割や機能を低下させているという今日的課題を把握することができたのである。

生徒たちの理解は，ワークシート記入から見て取ることができた。「アカ族は伝統を守るためにタイ語と並んでアカ語の学習も学校で行うと良い。」，「伝統を観光資源とするなど村おこしをするとよいのではないか」など課題を正確にふまえた改善のための意見が多く出されていたのである。

３．今後の課題

第一の課題として追試の反復があげられる。本年度は，２年生３クラス１２０名を対象に４名がリレー式の形態で実践を行った。場所も大食堂という特殊な環境の中での授業であった。大人数対象のために，授業を通して後ろや横の方など全体に目を配ることが困難であり，生徒たちに集中力を欠かせる場面も散見された。個別のクラス毎に，教室において，より落ち着いた環境の中で実践するとどうなっていたか，比較検討してみることが課題として挙げられる。

第二の課題は，スタディ・ツアーを利用した研究教育実習のあり方に関する課題である。昨年度と今年は，新潟県国際交流協会の援助でツアーを企画し，その成果に基づいて教育内容開発と実験授業を行ってきた。次年度以降は，ツアーへの援助ではなく，アジア理解のための講演会開催への援助に協会の方針が変換される予定である。講演会参加だけでは，教育内容開発が困難であることが予想される。従って，研究教育実習として，アジア理解のための教育内容開発を継続するのか，継続するとしたらどのような方法で教育内容開発研究を補うのか，例えば有志による自費でのツアーを計画するのか，あるいはテーマを他に切りかえて新しい方向を模索するのか，という課題が生じている。

（新潟大学教育人間科学部　児玉康弘）

（平成 20 年 3 月 21 日受理）